

『幼獅』創刊－救国団と台湾反共文学

高橋明郎

1. 序 説

『幼獅月刊』（以下『幼獅』）は「中国青年反共抗俄救国団」（以下救国団）が主体となって30年以上にわたり発行された青年（主として高校、大学、専門学校生）向け総合雑誌である。

出版には当然高度に政治的な反共という狙いがあるが、この雑誌の半ばは文芸作品で占められている。救国団の活動、とりわけ学校現場や長期休暇のプログラムについては、特に教育分野の研究者が整理している。しかし、文学史上の意味については、詳しく取り上げられることが少ない。

文学史上、『幼獅』発行の時代は反共文学の時代であるが、今日では台湾文学研究の主分野は日治時代の日本語作家や郷土文学運動以後の作家研究で、大陸出身者による台湾での反共文学は、そこで生まれた作品のレベルも理由⁽¹⁾となって、あまり重んじられることがない。また、扱う場合も、『幼獅』の他に、『幼獅文藝』も発行されていることから、文学史上は通常『幼獅文藝』の方が分析の対象となりやすい。本稿は、むしろ政治理論と文芸が隣り合わせに発表され、直ちに文芸が政治に対応しやすい総合雑誌である『幼獅』創刊号を取り上げ、当時の政府と文芸活動の方向を考えることとする。

(1) たとえば葉石濤の『台湾文學史綱』に見られるように、50年代の反共文学は、台湾人作家たちが言語上の障碍もあって手を出せなかったこともあり、ほとんど台湾文学に被害のみもたらして価値のないものという描き方がされる。

2. 反共救国団と『幼獅』

まず、救国団と『幼獅』の関連を確認しておこう。

救国団の成立は、民國41年（1952）10月。蔣介石が団長、蔣經國は主任となった。後に続く青年人材を育成教育するという名目はあるが、政府の教育部とは一線を画していて、共産党への敗戦経験から、青年達が現政府に不信を持ち浮き足立ってしまうのを防ぐ為である。中央政治学校（現在の国立政治大学）卒業生で、蔣經國の肯定的な伝記を書いた漆高樹は、この救国団の特色として、青年が国家の用に立つよう社会各方面でサービスを提供し、実用的なことを第一に活動し、党派色を持たないことを挙げているが、少なくとも1950年代にあっては、これは国民党色そのもの、政治性に浸かった組織であった。蔣經國が構想し作った嘗ての三民主義青年団の衣鉢を継ぐもので、三民主義、救国に、抗日ではなく反共を加えて、これらがキーワードとなった。

実際の活動は民國42年（1953）4千人ほどで開始されたが、やがて万余を動員するようになった。救国団は、学校外の青年や海外華僑も含め活動を主催し、青年たちに反共愛国思想を植え付けた。大陸向けにさえアドバルーンを飛ばし宣伝したほどである。救国団の価値観による「優れた」青年は各機関から推薦され賞を受けた。

同時に、多くの訓練活動を主管することで、国民党は学校現場に入り込む恰好の立場を得たことになる。

救国団の国の中での位置はというと、次のようなものである。政治行動委員

(2) 漆高樹『蔣經國の一生』（民國80，傳記文學出版社，台北）p 102-103

(3) 民國27年（1938）武昌での国民党臨時全国代表大会で三民主義青年団設立が認められた。抗戦のための青年訓練を目的とし、蔣介石が団長、蔣經國は江西支団の幹事長となり、自ら精神訓練を担当するなど積極的に働いた。また民國33年（1944）重慶馬家寺に中央幹部学校を設けたが、これによって、当時の軍や党と同じく、内部で幹部を養成することになる。ここでも蔣經國はカリキュラムの編成や、孫文・蔣介石の訓話をもとにした講義など相当の精力を注いだ。幹部養成校中央政治学校で十分影響力を発揮できなかった蔣介石にとっては、蔣家直系の勢力を作る上で有意義だった。

会(後の国家安全局)の下に、政、党、軍の関連部署が連なるが、党の系統に、大学などの党務組織である知識青年党部、各種学校に繋がる救国団が属するのである。

救国団は、当初政府の教育行政から独立して活動していたが、民國 47 年(1958)に財団法人格の団体となって組織も人員も教育部に組み入れられた。これは、国民党臭を薄める幾ばくかの効能と同時に、完全に正規学校教育現場に軍事・政治教育が入り込んだことも意味した。各校には訓導処が置かれ、訓導部長やら軍訓教官やらが送り込まれた。

主任の蔣經國は、副主任として胡軌を据えた。胡軌は黃埔學校第 4 期卒(共産党元帥の林彪と同期)の二級上將で、三民主義青年団の江西師団部書記から団の中央幹部学校教務長を務めた。上海では戡亂建國總隊の総管だった。特務系の大立者とも目されたが、幼獅文化公司から『中国通史』(民國 74, 1985)、幼獅書局から『十年拾穗』(民國 58, 1969)が出ているほか正中書局から『國父思想』(民國 55, 1966)『國父的教育思想』(民國 59, 1970)、また同社から教科書として、『高級中学三民主義課本』(民國 59, 1970)『高級職業学校公民』(民國 61, 1972)を出版した。

台湾接收後の国民党政府が、教育を重視したのは疑いがない。その重点は、当初こそ国語教育という名の日本排除であった。しかし、遷台後は、既に敗戦国である日本よりも、その重点が次第に現実に台湾に敵対している中華人民共和国、中国共産党への対抗に移ったのは、極めて自然なことである。

台湾の少年には、一たび中学に上がれば、「国父遺教」の暗誦に始まる政治教育があり、大学の必修科目にも「三民主義」(孫文)や「中国之命運」(蔣介石)学習が置かれた。

結局のところは、より政治的に直截な救国団が設けられた。これは民國 39 年(1950)に作られた「中国青年反共抗俄聯合会」が民國 42 年(1953)に改称されたものである。

情報系統に力を発揮することを期待されていた蔣經國は、李煥に交代するまで実に 20 年(聯合会時代を含めると 23 年)に渡り主任としてこの業務を監督

した。各学校で導入された軍事訓練も、この組織が主管していたし⁽⁴⁾、加えて学校での「週記」を通じた思想チェックも重要な業務であった。⁽⁵⁾このスパイ的な仕事は、救国団の第1組により行われていたが、もう一つ青少年に直接影響を与えたのは、文化面を担当する第2組が、出版社を作り多くの出版物を出したことである。

抗日戦争の時期から、国民党は出版、放送等による宣伝を重視していたし、また文芸によって国民に中華民族の自立を訴えようと言う作家たちが存在してもいた。問題は、彼らにとっての武器は、彼らに向けての武器にもなりうるということで、当然台湾でも、自らの意図通りの出版物が出されることが重要であった。新聞の分野で既に規制策を採った国民党は、青年向けの雑誌にも、似た方針を採用する。

この系統の会社には、時に幼獅の名が冠された。この論文で扱う『幼獅』を発行する幼獅月刊社のほか、幼獅出版公司や幼獅廣播社などがそれぞれあり、また尹雪曼を会長とする中國青年寫作協會も、劉枋を会長とする中國婦女寫作協會も第2組影響下にあった。幼獅通訊社の社長は他ならぬ胡軌であった。

『幼獅』は、楊群奮を主篇として、民國42年(1953)創刊、もともと救国団が出版し、後民國47年(1958)から幼獅文化事業公司、幼獅月刊社に引き継がれ、民國78年(1989)6月まで発行された。『幼獅文藝』は少し遅れて民國43年(1954)発刊で、当初は中國青年寫作協會常務理事、監事が交代で編集に当たった。

いずれ展開上後の論文で取り上げることになる、15年以上後に発刊された『幼獅少年』雑誌(こちらは今日も発行されている)との比較で言うなら、想定読者の最も大きな違いは、『幼獅』の読者層である高校生は卒業時には国民

(4) 民國42年(1953)7月に「台湾省高級中學及專科以上學生軍訓實施辦法」が成立し、ここにすべての高校以上で構内で軍事訓練を受けることが義務づけられ、またその実施組織として救国団が置かれることが明記された。

(5) 1週間ごとに担任に提出する記録。生徒が自分で生活点検、学習点検などの項目に記入する。生徒指導の基本的な手段として使われた。張大春の『少年大頭春的生活週記』は、この形式に則った小説である。

党への入党資格年齢に達しているということであり、宣伝の政治的な意味が極めて大きかったということである。

3. 『幼獅』創刊号

さて、この創刊号は、ほぼ40頁の雑誌であるが、当時の雑誌としては特に小さな作りではない。2で見てきた救国団の目的から、収載されるのは①反共②愛国③中華民族、中国文化重視に関わるものである。創刊号の内容は、発行の理念に関するもの、文芸作品、文芸理論、文化理論に属するものに分けられるので、逐次目的との関連を見てゆこう。

3.1 創刊の理念

創刊号の発刊詞は、「讓我們怒發獅子的吼聲」と題された長文である。

①に関わることとして、まず、20世紀という時代にあっては、人間は機械化のもと一生労働に駆り出される状態であり、科学が人間の幸福に奉仕する状態にないことを指摘する。共産主義は、西洋文明への反動であり、平等を謳ったが、実体は平等に貧しいことであり、政治的平等、経済的平等などが、非常(6)に原始的なものであると非難する。

③に関わることとして、経済援助や軍事支援だけでなく、この人間性に対する支援、思想・精神の武装を重視せねばならないとする(7)。

中華民国の現在の苦境は、孫文の中国固有の文化に根付いて侵略にうち勝つべしとする教えを軽視した結果であるとし、共産党政府が打到孔家店、反對舊

(6) 共産主義承物質主義的の末流，對西方文化來了一次徹底的總反動。他們以經濟平等鬥爭政治自由，結果是自由毀滅於集體，而平等亦歸於罪惡。生活上的平等是一塊黑麵包的平等，工作上的平等是奴隸集中營的平等，經濟上的平等是榨乾最後一滴血的平等，政治上的平等是沒有說話自由也沒有不說話自由的平等。推而至於人格上的平等就是一切向禽獸看齊的平等。子弟鬥爭父兄，個人出賣國家，男女杯水主義，都是從這個物質平等上出發的，本亦無足深怪。醜惡哉，共産主義的平等，禽獸世界的平等！所以反共抗俄的鬥爭，是和乎對侵略的鬥爭，是愛國主義對賣國主義的鬥爭，更是人性對物性，文明對野蠻的文化鬥爭。

(7) 大家只作軍援經援的計較，而不努力在人性方面，武裝其思想與精神。

禮教などという政策を採っていることを厳しく非難する。

そもそも本来の中国文化は異民族の清王朝 260 年の統治と約百年の帝国主義の蹂躪で衰微の危機にあつて、欧州が共産党の攻撃に対応する共通基盤としてキリスト教という宗教を有していたのと比べると、甚だ心許ないと分析している⁽⁸⁾。

②に関しては、時代認識として、大陸を失ってわずか3年しかたつておらず、この事態を、単に国号、国旗、国歌が変わるということではなく、中華民族の滅亡だと言う⁽⁹⁾。

こうした非常時にあつて、蔣介石主席と三民主義を固く信ずることで、共産党政府を倒し、三民主義の新中国を際立たせる。

最後に、釈迦の「発獅子吼」を借りて、読者たる青年層に、この雑誌を宣伝塔として戦うと宣言する⁽¹⁰⁾。

また、創刊号には新年筆談会として『愛國青年怎樣迎接四十二年』という企画が有り、周至柔、郭寄嶠、程天放、陳雪屏、錢思亮、劉真、任培道の7名が文を寄せている。青年達への反共反攻への激励、呼びかけである。周至柔は青年達の自発的結集を国家、民族の危急での時代を画する創挙だとし、郭寄嶠は救国団は革命に不可欠な組織で自由中国がエネルギーに満ちていることを示すものだとする。彼によると、總統の考えに照らせば、救国団は教育的、集团的、戰闘的組織だということである⁽¹¹⁾。

(8) 不過西方還有一道宗教的防線，而我們的民族精神的防線，在日益式微之餘，又遭受所謂新文化著的打擊

(9) 神州陸沉三年了！我們癡望海那邊的家鄉，不僅灑故國河山的新亭之淚，而痛感船山先生的天下之悲。鐵幕裏的世界，是人禽混雜，擗獸食人的地獄世界，鐵幕裏的氣氛，是腥氣，膻氣，妖氣，邪氣的惡毒氣氛。這不是換政權，而是亡國家，又不僅是亡國家，而且是滅種族，亦即是船山深痛的「亡天下」。我們能忍令大陸沉淪，國旗變色，國歌變徵嗎？我們能忍令同胞親友，煎熬苦難，忍死呻吟嗎？…我們要從人性深處，發出青年的光，青年的熱，青年的力，去和共匪物性，野性，獸性大鬥爭。

(10) 讓我們青年朋友齊發獅子的吼聲，反極權，反共產，反侵略；讓這個幼獅月刊來做大家獅吼的擴音器，傳遍寶島，傳遍大陸，傳遍海外的僑胞。

(11) 遵照 總統的昭示，中國青年反共救國團是一個教育性群眾性和戰鬥性的組織…

程天放は、ここで、この国家存亡の時に、すべての愛国青年は必ず救国団活動に参加すべきだとして、その任務を具体的に示している。軍務外の青年も、この一年に防空、防諜、消防、救護、通信、偵察、運転、修理などの技能を修得しておくことは台湾が空襲⁽¹²⁾にさらされたとき損失を食い止め、大陸反攻の際にも有効だと説いている。

陳雪屏は民族精神教育方案、生産労働教育方案、軍事訓練実施辦法の制定など学校教育と国家の仕事が平行して行われていることを強調する。また錢思亮はたとえ今年反攻に至らずとも反攻復國の準備を怠るなと言い、女性の任培道も今年こそ反攻、雪辱の年と激励する。

劉真は、学校教育行政の実地担当者として、前年からの教育改革の諸方案を受け入れること、救国団に参加すること、各種専門技能学習に力を入れることを求めている。

この筆談に連なったのは、当時の政界教育界の名士たちである。

周至柔は嚴家淦の後任の台湾省主席となった所謂太子派（蔣經國派）の人物である。

教育界のトップとして程天放が加わる。彼は、当時の教育部長（文科相に相当）であるが、五四運動時代から活動目覚ましかった人物である。清の光緒25年（1899）杭州生まれ。復旦大学卒業後米国留学、イリノイ大学政治学修士、のちカナダのトロント大学で政治学の学位を取得した。カナダでは『醒華雜誌』編集長も務めたし、上海学生聯合會會長として五四運動の際に学生をリードした。母校復旦大学で教壇に立つが、民國16年（1927）国民党江西省党部の執行委員と宣伝部長を務めてからは党内の役職を重ねて行く。

国民政府参事，中央軍監団政治総教官，安徽省教育厅長，安徽省主席代行，

(12) 愛國青年不一定各各要做軍人，到前線去殺敵，在後方，在任何環境，一樣地可以做反抗俄的工作。所以我希望每一個不在軍隊中的愛國青年，都要在民國四十二年中學會一種與戰事有關係的技能，如同防空，防諜，消防，救護，通訊，偵察，駕駛車船，修理工程等。…（所以）一旦戰事緊張，愛國青年如果沒有這些技能，那只有束手旁觀，心有餘而力不足。如果具備了這些技能，那末敵人來空襲台灣時青年可以協助政府，維持秩序，減少民眾的傷亡，財產的損失，國軍反攻大陸時，青年更可以隨軍前進協助戰事的進站。能做到這點，才可以當愛國青年的名而無愧了。

国民会議代表，中央宣伝部副部長，湖北省教育庁長，中央政治学校教務主任，四川大学学長，中央政治学校教育長，国防最高委員会常務委員や駐独大使を歴任した後，民國36年（1947）立法委員となる。国民党政府が遷台する民國38年（1949）国民党中央宣伝部長であり，翌39年第5代の教育部長（文科相に相当，遷台後の政府としては初代）となった。

彼の任期に，「戡亂建國教育實施綱要」が定められ，大学専門学校での軍事訓練必修化，大学や専門学校での「三民主義課程」設置がなされたのである。

陳雪屏は，当時の国民党改造委員会第一組組長で，また同年台湾大学心理学系教授にも就任した。清の光緒26年（1900）江蘇省生まれ。北京大学哲学系で学び，米国コロンビア大学に留学，民國19年（1930）帰国して東北大（中国）の教育心理系主任となった。

民國27年（1938）から35年（1946）まで，大陸の昆明で北京大学，清華大学，南開大学が戦時聯合大学を結成して，左から右まで広く学術の自由が尊重されていたが，最後に国民党政府が，政治的側面を持ち込んだ。陳雪屏はこのとき聯合大学の三民主義青年団の責任者だった。（が，国民党の指導の持ち込みに，そう厳格でなかったと言われる。）遷台直前の民國37年（1948）国民党政府の教育部長代理を務める。遷台時には台湾省教育庁長だったが，特に前年初代の国民党青年部長を務めており，青年教育分野で力が有った。

従って彼のここでのコメントは，その専門にからめたものと言える。

錢思亮（字，惠疇）は，時の台湾大学教授で教務長だった。清の光緒33年（1907）杭州生まれで，清華大の化学系を卒業，アメリカのイリノイ大学で有機化学の学位を得た。北京大学化学系主任となったが，北京が陥落すると長沙臨時大学，そして昆明の聯合大学教授となるが，第二次大戦後また北京大学へもどる。遷台とともに台湾大学に移り，雑誌創刊の年に学長に昇任する。

最も若い層に属するのが劉真（字，白如）である。民國2年（1913）安徽省生まれ。安徽大学哲学系卒で，米国の他，日本の東京高師（現筑波大）に留学した。民國38年（1949）彼は日本の台北高校跡地に移管されて2年目の台湾省立師範学院長となり，民國44年（1955）に師範大学に改組した際，そのま

ま学長となった。立法委員との兼務を避けて校園での教育に力を注いだことから分かるように、教育者として極めて有能であり、師範大での功績の随一は中国文化の伝統を重視し、国学者の錢穆ら名士を台湾に招聘したこととされる。創刊号執筆陣の一人である大儒牟宗三も、彼によって教員に招かれた一人で、加えて中国語文学会を組織して国語教育普及に務めた。これらの功績で2005年に師範大学には銅像が建てられたほどである。

任培道は国民党立法委員で、教育分野出身委員として、その任期の大半を教育委員会で務める。大陸で楊昌濟門の三指に入る女性の弟子の一人で（ちなみに男子で三指の弟子の一人とされたのが毛沢東）、南京高師から北京師範大学を経て米国留学、カンサス大学とイリノイ大学で修士を得る。各地の小学校長、師範学院教授を経て民國10年（1921）直隸省党務指導委員会婦女部部长、中央党部組織設計研究委員、女子師範直屬三民主義青年団書記長などの党務を務め、この時救国団指導委員であった。

このように、党の青年対策に則った雑誌としては、まず、大陸出身の各界名士の名前で権威付けを図ったと言える。

3.2 文 芸

ここに収録されているのは小説4篇、散文が1篇、詩が古典を含め4首である。

3.2.1 小 説

まず、小説であるが、謝冰瑩の『李老太太』、方瑜の『青春永在』、楊念慈の『彩彩』、劉心皇の『鷹』である。

まず、起用された作者たちであるが、当然ながら、いずれも大陸出身で古くから文芸活動で活躍した人物が多い。

台湾の著名な女性作家謝冰瑩（原名謝鳴岡，字，風寶）は、男子に勝るとも劣らない抗戦経験を有する。清の光緒31年（1905）湖南生まれで、挙人の父を持ち、やがて湖南省立女子師範に進み、十代から創作投稿を始める。中央軍事学校女生隊に進んで北伐に参加、『中央日報』に発表され翌民國17年（1928）

出版された『従軍日記』は、戦闘文芸そのものである。民國20年(1931)と24年(1935)早稲田大に留学したが、25年に満州皇帝訪日歓迎を拒否し、日本の警察に抗日反満罪で逮捕され拷問を受ける。この経験を民國29年(1940)『在日本獄中』として出版、また進んで前線に出、『軍中隨筆』『第五戦区巡礼』を示した。一方当時の中華民国政府への不満も強く、特務に狙われて身を隠す事態にもなった。『廣西婦女』などの編集を務めたが、民國34年(1945)漢口で幼稚園を開設、やがて児童文学の創作も始める。

台湾での活動は、民國37年(1948)台湾省師範学院に教員として招聘されたことに始まる。雑誌創刊2年後の民國44年(1955)には台湾省婦女寫作協會監事となった。やがて米国に移民したが、2000年に亡くなるまで多数の作品を残したし、また『新譯四書讀本』(民國65, 1976 三民書局)『中華文化基本教材』(鄭正浩らと共著, 民國66, 1977 三民書局)『新譯古文觀止』(民國69, 1980 三民書局)など中国文化を広める書も出版、また彼女自身に対する研究や評も数多い。

方瑜はこの雑誌の主編楊群奮のペンネーム。当時の救国団文教組副組長である。

楊念慈は民國11年(1922)山東生まれ。大陸で従軍したが、台湾に来てからは文筆活動に力を入れた。彼は中国文芸協会の最初の小説部門授賞者で、教育部の文学獎金も得た。

劉心皇は民國4年(1915)河南生まれ。大陸では文学活動を通して抗日意識を高めようとした。民國37年(1948)国民大会代表となり、台湾に移ってからは『幼獅文藝』を主篇した。

創刊号の小説は、これ以後の投稿作品のモデルにされる運命にある。このため、編集方針に沿う内容になっている。

『幼獅』の徵稿に拠れば、これは総合雑誌で、文芸が50%を占め、作品を公開募集すること、愛国精神に富む著作を歓迎すること、原則四千字以内とすることが明示されている。

どのような作品を求めているかは、趙友培の『新的認識和心的努力方向一献

給青年的，反共的，救國的作家們』という文に仔細に示されている。

青年作家でこそ、熱情があり犠牲も恐れず、反共作家でこそ正確な思想，堅固な信仰を持ち，救国作家でこそ，厳格な訓練を受け厳密な組織に参加している。具体的には，文中の注意事項を見れば良からう。暇つぶしのような作品を書かず，説教的内容に止まらず，低俗に渡らず，自己宣伝に陥らず，メモのようなものではなく真実を明らかにし，国策に沿いながらその宣伝に止まらない⁽¹³⁾。

正にこの1950年代に反共軍歌，愛国歌が盛んに歌われたが，趙友培は、『中国女童軍軍歌』『反共行進曲』を初めとする多くの軍歌の作詞家であった。また趙友培は「國軍新文藝運動輔導委員會」結成時にも中心となって，副主任委員を務めた人物である。

実際の小説の内容は，ほぼ1) 必ず家族が内戦で分断されている。2) 大陸で悲惨な経験をしていて共産党への恐怖を口にする 3) 愛国的人物が登場する 4) 自由中国がキーワード 5) 台湾もしくは国民党への期待が含まれるということである。

『李老太太』は基隆着岸の場面に始まる。主人公の老婆（59歳だが，当時としては立派な老婆である）は孫の小玲を連れ，娘が迎えてくれる基隆へ向かったのだが，老婆は，陥落した上海から香港へ命からがら逃れて来ていたので，実はここは既に共産党支配下の上海で，騙されて連れてこられたのではないかという不信がぬぐえない。

李老太太の上の息子は嫌々八路軍に参加させられて今はおらず，下の息子は八路軍によって生きながらに焼き殺され，李老太太自身も養老院に三月も留め置かれて命をなくすところだったし，何度も自殺を試みた。このためノイローゼになって時に奇矯なふるまいがあり，孫娘も陰では「狂人（瘋）」と呼んで

(13) 一 為人服務，而不供人玩弄，二 啟人智慧，而不板起面孔，三 予人趣味，而不黃色低級，四 發揮個性，而非自我宣傳，五 表現真實，而非流水帳簿，六 宣揚國策，而非八股教條

いる。

付き添ってきた張志雲から上陸前検査が有ると言われると、唯一残った財産である金の指輪を検査官に渡し面倒がないようにしてくれと頼み、張志雲から、ここは自由中国で共産党関係者はいないのだから賄賂など贈る必要がないと諭される始末である。

娘に頼まれた税関の余氏が、先に会いに来て、道中大変でしたかと尋ねられるや、人民政府下では苦しいことなど無いとか、反米援韓であらねばならぬとか、共産党政府を持ち上げるようなことを口走る⁽¹⁴⁾。余氏が大分疲れているようだから休ませるよう言うと、今度は解放軍のため何でもする、二人の息子さえ帰してくれたらどんなことでもと苦衷を訴える⁽¹⁵⁾。同船の女性が慰め共産党はひどいことをすると同情するとその女性に、お前は反動派か、国民党のスパイか、人民政府はいい人たちだ、と反論する有様である⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾。

娘の小梅とその夫王書琴が迎えに来ていて、空軍勤務の王の手配したジープで台北へ迎える段になっても、ここはどこか、運転している王は何者かと錯乱するのだが、娘に、もう自由中国に来たのだから心配ないと言われ、ジープに翻る青天白日旗を見て、正気に戻り、国旗を見、お前達に会えたら、もう死んでも思い残すことはない、と叫ぶのだ⁽¹⁸⁾。

ここでは、愛国的姿を見せるのは李太太、家族は台湾、上海、香港とばらばらで、息子は共産党に殺害され本人も迫害され精神的にも傷を負っている。一方自由中国の青天白日旗への信頼は強い。

方瑜（目次では万瑜）の『青春永在』は、民國37年（1948）揚子江を挟んで北岸の共産党と対峙していた南岸の「私」の職場も転進を余儀なくされ、既

(14) “不苦，不苦，「人民政府」領導下的人民，沒有一個苦的，…我們要支前，要反美援韓，我們要參軍，老年人進養老院，孩子進兒童團…”

(15) “不累，不累。同志，我還可以替人民解放軍打草鞋，拉鞋底，只要你們換的兩個兒子放回來，什麼苦工我也願意做…”

(16) “共產黨真缺德，把好好的一個人弄成這個樣子。”

(17) “怎麼？你這反動派，你這國特！你敢罵人民政府，他們是好人，…”

(18) “我一切滿足了，只要看到了我們的國旗，看到了你們，我就是馬上死去，也心滿意足了！”

に皆避難した後の故郷に別れを告げた時の物語である。3ヶ月前から曾という、校長の旧友である老人を家に置くことになったが、その老人と「私」は駅まで同道する。老人の居地は抗日時期には4年も日本軍の攻撃に持ちこたえたが、1941年頃から共産党勢力が入り込み、内部で分断されついに惨状を呈したのである。

ここでも共産党に分断される地域、一家が示される。

楊念慈の「彩彩」は、台湾で少女の小玲（上記小説の登場人物とは勿論別）に、古い写真上の王彩彩を説明するという内容である。

抗戦時期の大後方、四川の中学教師の父と、母親の娘王彩彩。生活のために病院で看護婦をするようになった母は、上海出身で米国遊学帰りの院長と良い仲になり、夫に離婚を迫る。病弱な父は離婚を承諾するが間もなく病に倒れ、問題の病院に入院、毎日別れた妻と顔を合わせる事態になり、間もなく9歳の王彩彩を残して死去する。

王彩彩は父の旧友の「私」に託され、母親の所へ行こうとしない。彩彩の小学校卒業時抗戦が終わり、大後方の人員は次々旧地へもどる。かの院長もそうで、母は裁判所に訴えて彩彩を無理矢理「私」のもとから上海へ連れてゆく。

民國38年（1949）、内戦の急により「私」は広州に逃れる。知識青年訓練の対象を試験していると、受験者に彩彩がいる。彼女の話では、継父は抗戦勝利後上海に大きな病院と薬局を開き相当儲け、母はその生活を享受したが彩彩は楽しまない。後内戦悪化で継父と母は香港に脱出、伝手を頼って上海の財産の保全作業をしている。彩彩は、そこを逃れて広州で軍に応募した。そして自由の地台湾へ向かおうと希望したのである。⁽¹⁹⁾

そこで、「私」は方策を講じようとするが、次に彩彩を尋ねてみると、母親に見つかり香港に連れ戻された後だった。上海から台湾に逃れた友人の情報として、その後上海へ戻った一家の消息が記されている。

継父は上海で一時勢いを盛り返したが、民國39年（1950）春節の頃、17歳

(19) 為了自由，為了國家，也為了自己的前途，彩彩希望能到軍隊裡來，能到台灣來，她知道台灣是一個能夠確保自由的地方。

の彩彩は発病し、自ら毒を飲んで死ぬ。継父は去年の春共産党により財産を没収され、奸商との判決を受けて生き埋めにされ、母親は行方知れず。

ここでは、一家は上海、香港、広州と別れる。愛国者は彩彩であり、自由を求める同類の子供達を救い出さねばならないと、作家は結ぶ。⁽²⁰⁾この「私」自体は既に台湾という一時の安定の地にいる。一方、共産党に取り入ろうとし、結局共産党に財産を奪われてしまう継父は自業自得そのものと評される。⁽²¹⁾

劉心皇の『鷹』は、大陸が舞台である。とはいえ、内戦地から逃れようとする人々を満載した貨物列車の上である。

長沙で乗り込んだ「私」は、湖南省と広東省境界の駅で大雨の中停車中の貨車の上で古朋に出会う。彼は国民党軍として町を守っていて共産党の捕虜になったところを、見張りの隙を狙って脱出して来た。漢口で親類に身を寄せている時に、郷里の一家4人が全滅したことを知る。「私」はあきらめねば報復の日がある、⁽²²⁾と慰める他ない。

ところが、広州で滞在中に古朋は従姉妹の婉尼に出会う。彼女は学校を繰り上げ卒業していたが、進学せず従軍したいと言う。2人は結婚し、再び北へ戻り戦うと決心する。ハネムーンも戦地で過ごすつもりである。

「私」は称えて戦地のハネムーンを讚美する。⁽²³⁾

実際の情勢は、彼ら以外は「私」も含めすべて大陸から脱出する舟の切符を手に入れているのだ。彼らだけが、大衆のように海外へ逃れず、新婦と共産党と戦うため北へ戻ると、⁽²⁴⁾作者は強調する。

(20) 小玲，記住，彩彩是死了，但是像彩彩這樣熱愛國家，嚮往自由的孩子，在匪區裡何止千千萬萬，我們要記住她們，要拯救她們！

(21) 我再附帶的告訴你那些投機靠攏者的下場，都是自作自受，在劫難逃的。彩彩的後父是一個好例子，據逃出來的那位朋友說，在去年春天，那傢伙被共匪榨盡了財產，以奸商的罪名公審處決，活埋了，彩彩的母親被掃地出門，不知死活。

(22) “自己不毀滅自己的前途，終有復仇的一天。”

(23) 回战地度蜜月，够甜蜜！够刺激！够紧张！

(24) 這時，出他以外的許多朋友，都在辦手續，訂船票，預備再走一程。只有古朋能有勇氣還向北走，要往人家不願去不敢去的地方。

ここでは愛国者は古朋、そして婉尼。一家は共産党に根絶やしにされた。作者は最後に、退避した自分たちは軟弱で、鷹のように勇猛な戦士を称えるべきだと総括する⁽²⁵⁾。

これらの作品は、離散する家族の感情を一応追ってはいるものの、共産党からの被害描写はそっけなく、また戦闘の描写を欠くため、いずれもメニュー通りの展開という感は否めない。一方では、以後応募してくる層が、必ずしも戦闘を経験した者と限らないため、その条件をあえて外して構成したと見ることも出来る。

3.2.2 詩 歌

まず、『幼獅頌』という題で、光中、紀弦、古之紅、南星、楊美英の5人が詩を寄せている。

紀弦(本名路逾)は、民國2年(1913)江蘇省生まれ。大陸で詩集を数冊発表、台湾に民國37年(1948)に来て、翌年から成功中学で教鞭を執り、幼獅発刊の民國42年『現代詩』発行を開始、のち、民國45年(1956)同誌上で彼は「現代派」の宣言をすることになるが、その大義の最後に、なお「愛国、反共、擁護自由與民主」を挙げている。『新詩週刊』発起人の一人だが、当時の中華文芸獎金委員会や国防部の覚えめでたい詩人であった。例えば『怒吼！台湾』で中華文芸獎金委員会の五四獎金第五位、『飲酒』で同會短詩部門第三位となっている。また『幼獅文藝』の30巻途中から39巻までの主編者も務めた。

今日台湾を代表する詩人の一人として評価される紀弦だが、この50年代前半までは、反共あるいは愛国の模範的作家であった。紀弦は大陸で汪精衛に近かった(当時の筆名は路易士)と目され、渡台後も一部から漢奸批判を受けていたため、それを払拭する意味での路線とも言える。

(25) 平時不唱高調的鷹鶴，到犧牲的時候，不會退避；平時只唱高調的鶯鶯燕燕，到危難的時候，不是遠飛就是甘受屈辱。

我們太軟弱了，需要向鷹鶴歌頌。它們是飛禽中的猛禽，我們應是人類中的猛士。
古朋！我希望你和你的婉尼，在戰地像鷹鶴一樣的飛揚，像鷹鶴一樣的堅強！

(余) 光中は、民國 17 年 (1928) 南京生まれ。10 歳で上海に逃れ香港経由で重慶の父に落ち合う。金陵大学外文系から廈門大学外文系に転学、父母は香港に移住したが、本人は民國 39 年 (1950) 台湾大学外文系に編入、卒後国防部少尉翻訳官を経て各所の大学で英語教授。その詩は台湾や香港で教科書に掲載されている。民國 51 年 (1962) には中国文芸協会の新詩獎を受け、民國 55 年 (1966) には十大傑出青年に選ばれている。『我的心在天安門—六四事件悼念詩選』を出しながら、一方詩集を大陸で出版する際天安門事件に関係する『讀香港』『國殤』などを削除するなど、政治的立場を批判する声もある。

古之紅 (秦家洪) は徐州の江蘇学院卒、台湾で教職にあり、民國 42 年 (1953) 陳其茂 (後述) らと『文藝列車』を創刊した。

『幼獅頌』は獅子のイメージで作られた作品が多いが、紀弦は、台湾で挙げる声⁽²⁶⁾がスターリンや毛沢東を脅かす、と直截に政治的狙いを表現している。

次に、宋膺は『青年・反共・救国』という朗誦詩を寄せているが、これは清が青年の手で倒されたように、対日抗戦を青年の支持で乗り切ったように、蔣介石主席のもとで乗り切ろうという曲のない軍歌と言うべき者である。共産党やロシアの攻撃に対し、青年達は先人の血塗られた抵抗の足跡に倣って、指導者と進むべきだと歌う⁽²⁷⁾。

作者の宋膺は三民主義の教師を務め、また台湾大学出版局で活動した。創刊の年の5月28日詩人節に『中華民國萬歲』という詩を合作して合唱する行事があったが、この時詩を構成したのが、宋膺や紀弦であった。

後、民國 54 年 (1965) 蔣介石生誕百年紀年行事の際に、「偉大的國父」という曲をまとめた。(黄友棣作曲)

艾廣の「黄昏」という短詩は、川沿いを散策中、鷹が突然出現するのを、一条の光が胸を照らすようだと言っている。

(26) 這吼聲，發自綠島台灣，向著四方擴張，教史達林戰慄，使毛澤東喪膽。

(27) 如今，國家又遭遇了空前的苦難，共匪賣國賣祖先，俄冠霸佔神州，搶走了我們祖宗留下的，無盡的豐富的寶貴遺產，今天，時代青年，更要緊緊的團結在領袖的四邊，踏著先烈的血跡，手攜手，肩併肩，齊一步伐，勇往直前

3.2.3 美 術

陳其茂は「勝利的保証」という国民党軍兵士を描いた版画と若い女性を描いた「活躍的青春」を載せる。

彼は民國 15 年（1926）福建生まれで、廈門美専で教育を受け、国民党政府遷台で台湾に渡ってからは基隆、花蓮、嘉義で教職に在った。戦後台湾版畫の代表的作家で、2005 年に亡くなった。雑誌創刊の年、救國團寫作協會主催で彼の木版画展が開かれた。

民國 41 年（1952）12 月 1 日の中国青年反共救国団台北市学校大隊団員宣誓式挨拶で蔣經國が紹介した、共産党統治区から香港へ逃れた兄に宛てた女子の手紙が、一部修正の上掲載された。

6 月 5 日に父を共産党に殺された娘は、兄が台湾へ行くというのに反対したことを後悔し、台湾の青年達に、凶悪な共産党を滅ぼさなければ、共産党があなた達を殲滅することになると結んだものである⁽²⁸⁾。

この内容を漫画形式にした廖未林（目次には梁中銘の名も見える）の『一封有血有淚的信』という木版も掲載されている。廖未林は、民國 13 年（1924、23 年とする資料もある）湖南省岳陽の生まれ。国立杭州芸専卒業、抗日戦争では「上海救亡漫画隊」に参加し、抗日宣伝に尽力、台湾に渡ってからは、記念切手やポスターなどのデザインで活躍した。梁中銘は、双子の兄梁又銘とともに民國 5 年（1916）上海に生まれ、軍にあつて『革命畫報』の編集長、社長も務めた戦闘画家として著名である。遷台後は『中央日報』の漫画主筆を務め、政治的な作品を作り、中国文芸協会でも重視されていた。民國 54 年（1965）、「國軍新文藝運動輔導委員會」が結成されるとその委員に選ばれた。廖未林、梁中銘とも台湾漫画の先駆者である。

3.3 理 論

前述のように、本誌の基本的スタンスは、半数を文芸作品とするということ

(28) 一切請轉台灣的青年朋友，我的悲劇千萬不可以效尤，你們不殺死兇惡的共產黨，共產黨就會把你們殺光

で、残りは理論、解説に割かれる。

3.3.1 文化理論

創刊号で最も紙幅が割かれているのは、牟宗三の『反共救国中的文化意識』である。基準1篇4千字を以後の編集方針にしている雑誌としては、6頁にわたる破格の扱いである。

「救人，救國，救文化，無迫於此時。」という書き出しで始まる論文は、まず、文化意識を高めることこそ危機への対応策とする。これを行わないと、中国文化を破壊するという点で共産党と同罪だ⁽²⁹⁾というのである。

まず、孔子、ついで孟子という文化意識モデルを説明し、以降南北朝の動乱期を経て唐の精神は生命原則に立ち、理性原則に立たなかったのが良く、宋は中華民族自身の文化が復権した時代とした。この間影響の小さくなかった仏教は、外来であること以上に反人文なのが問題との論である。宋や明の滅亡は一大事で、王船山の「漢唐之亡皆自亡也，宋則並堯舜禹湯文武相傳之道法之天下而亡之」という言葉を引いている。しかし満州人の清王朝で文化生命・文化理想は壊滅した。以後の文化混乱が共産党出現、マルクス主義流行の背景だとする。

その上で、「凡講文化意識，其主要意思是反物化，反僵化。」とし、秦や法家、共産党の思想や行動は物化の産物であり、ユダヤ教のパリサイ人らの律法は僵化である。

前年のソ連共産党一九回大会のスターリンのスローガンを非難した後、共産党やソ連に滅ぼされるのは、中華民族文化を根絶やしにしてしまうことで祖先に申し開きできないことだと訴える。

牟宗三は、清の光緒34年(1908)山東省生まれ(籍貫は湖北)。北京大学哲学系に学ぶ。当時の文学院院长が胡適で、程朱の學やデューイを専門とするのに対し、牟宗三のほうは、陸象山、そしてカント、ヘーゲル研究者で以後多くの

(29) 反共救國，若不把對於文化的態度扭轉過來，提高文化意識，則共黨極力摧毀，我們也參與其毀，結果共魔反不下去，而我們的現實自私的個人生命也不能保。

点で対立することになる。

既に大陸で数カ所の大学で教えていた牟宗三は、政府の遷台後、劉真に乞われて台湾師範大学で論理學や中国哲学を講じ、民國 47 年（1958）には、唐君毅、徐復觀、張君勱と『為中国文化敬告世界人士宣言』を発表した。後に香港大学に移ったが、定年後は台湾の教育部の要請で、台湾大学大学院などで講義をし、民國 84 年（1995）台北で死去した。現代新儒家を代表する一人とされた。

蔣君章の『伏波將軍の志節和功業』は、成語「馬革裹屍」の元となった光武帝時代の將軍馬援の紹介である。ここに示される故事自体は史書のままであるが、最後に、これを紹介した意図を次のように述べている。即ち一般青年に、彼のように貧家に生まれた青年がどうやって志節を研ぎ、どのように生計に苦労しながらも財より義を重んじ、どのように周囲の環境から推して正しい政治に進んだか、どのように国家に命を捧げたか、どのように書物から至理名言を得、また一旦口にしたことをやりとげたのかを知って欲しい、というのである。⁽³⁰⁾

台湾十大作家の一人とも数えられる蔣君章は、清の光緒 30 年（1904）生まれ、南京中央大学卒業。抗日戦争時期から台湾へ移る後まで、党務に励み、中央政治学校新聞系教授を務め、更に長期に渡って蒋介石の幕僚長だった陳布雷の秘書も務め、台湾では『中央日報』主筆や『新生報』⁽³¹⁾ 総編集となり、後政治大学教授になった人物である。本誌創刊時は革命実践研究院代理主任であったが、この頃から著述に力を注ぎ、中国史の人物紹介で多くの著書がある。後に

(30) 馬援已經是一個歷史上的名人，我在這個時代還要把他作比較詳細的介紹，讓我們一般青年朋友知道中國歷史上有這樣一個出生於貧困之家的青年，他如何砥礪他的志節，他如何能勞苦謀生而又輕財重義，他如何能審查環境而決定他正確的政治路線，他如何決心益生命貢獻給國家，他如何能從書本中得到至理名言，所說的話他自己都做到。…進來有人感到中國社會普遍地崇拜失敗英雄，在這個時代，未免有點兒洩氣，應該選些成功的永雄來崇拜，以鼓舞人心，如果我們真要作這樣的選擇，作者個人的意見，馬援應該是被考慮的一個人

(31) 『台湾新生報』は日本語新聞の『台湾新報』を接収したもので、大陸出身者が編集責任を持って中国語新聞化していた。台湾省政府の機関紙として、影響力は強かった。二二八事件の際も当局よりの報道だったのは当然である。後の報禁で、国民党系の『中央日報』、公営『中華日報』と合わせて九割のシェアを持つに至った。

台湾大学地理系教授になったように、本来中国の辺境研究で知られている地理学者で、この面では『国防地理』などの著作がある。民國75年(1986)亡くなった。

文学理論も含まれる。趙書紳は『文学與時代生活』で、漢代、外敵の脅威に対応しなければならなかった武帝が東方朔ら文人を軽視したことを例に、時代とも民の生活とも合わない文学は、閑人の手遊びにすぎないとし、そこから当代の文学を述べる。つまり時代や生活に外れる文学は、暫く放っておき、平和な時代になって鑑賞すればよいというものである。

また、葛賢寧は『論民族主義文学的實質與形式』という論文を示している。

彼は清代の阿片戦争や英仏聯合軍の役、中法戦争、甲午戦争(日清戦争)の際に、優れた愛国の詩文が生まれているのを指摘し、また戊戌の政変や義和団事件の時にも同様で、悲憤から優れた作品が作られ国民思想に影響したとしている。

一方、彼の見解では、五四運動以後の新文学は、西洋ロマン主義、頹廢主義、唯美主義、象徴主義など個人主義の文芸思想に傾斜して、こうした伝統を失ったともしている。その後の写実主義、自然主義、新ロマン主義も民族固有の道徳、精神を捨てた反民族文学であって、これが漢奸文学、洋奴文学に繋がる。蘆溝橋事件後ようやく民族主義は盛り返すが、8年抗戦の期間優れた作品は出ていない。これは相応の形式が欠落しているためである。

そして大陸が共産党の手に落ちて、民族文学は再度低調となった。遷台後3年間で、ようやくベテランと新人作家が成果を上げつつあるが完成にはほど遠く、ここで理論的裏付けをしようというのである。

葛賢寧は、このいわば序論たる歴史総括部分に紙幅の半ばを使っている。

そして、彼の言う民族主義文学は、西洋や日本の帝国主義の立場に立つ戦争賛美の民族主義のものとは異なる偽民族主義文学だと主張している。彼は英国のキプリング、イタリアのアヌンツィス、また共産革命後のソ連のトルストイなど多くの作家を引いているが、日本人従軍作家火野葦平、石川達三、佐藤春

夫、菊池寛などもその列に加えている。

その上で、自分たちの三民主義民族主義文学の目指す内容として、

- ①反侵略：他民族の中華民族侵略に反対し、国際協力を重視し、多民族との共存共栄をはかる
 - ②反世界共産主義：スターリンの世界共産主義は各民族の民族主義思想や運動を否定し、大スラブ主義を実現する為の者であり、これに対抗して、世界大同の理想を打ち出す
 - ③民族固有の道德・知能の回復と自然科学の普及で民族国家建設を助ける。
- の3点を提案する。

一方これに適合する形式として

- ①伝統文学の優れた形式、技巧を基礎とする
- ②西洋文学の技術を融合させ現代の中国民族に受容されやすいものとする
- ③この基礎の上で新しい形式、新しい技巧を創造する

現状の文学はひどいので、これを名作を産むよう進歩させねばならない、とする。⁽³²⁾

そして、こうして生まれる民族主義の文学は、共産主義文学の解毒剤、共産党勢力との対抗、中華民族復興に力が有るとまとめている。⁽³³⁾

葛賢寧は趙友培、劉心皇（いずれも既出）同様、民國39年（1950）創刊された『火炬』創刊号寄稿者にも名を連ねている。『火炬』は中華文芸獎受賞作の発表を許されていた雑誌で、葛賢寧は受賞作の『如夢記』の評を示している。

同号では趙友培は『關於小説寫作的研究』を李辰冬と連名で発表しているし、劉心皇は『火炬』を示している。

同50年中華文芸獎金委員会が張道藩の下国民党要人を集めて立ち上げられ、反共文学を誘導、『文芸創刊』で獎金付きで投稿を募集、この規定も幼獅

(32) 我們當前的文學表現的藝術太差了。要想我們的文學有進步，要想產出傑出的民族主義文學作品，大家還得埋頭苦幹，向深處遠處去研求。

(33) 我們的民族主義文學，應該針對共匪麻醉文學作解毒劑，應該對國民有教育的效能；應該作為對共匪的精神戰思想戰的戰鬥武器；應該展開民族國家建設的未來的宏偉的圖景；應該帶給民族以光熱和力，而促成民族的復興。

と似て、「發揚國家民族意識及蓄有反共抗俄之意義」なる作品を求めている。同じくこれも50年に国民党第4組の影響下に、三民主義文化を建設し反共抗俄富國を目指すとして、中国文芸協会が成立、既述のように同53年には、青年作家の団結と三民主義で中国統一を果たし青年の文芸活動を強化するのを目標に馮放民を發起人、劉心皇を総幹事として、「中國青年寫作協會」も成立、同55年には「台灣省婦女寫作協會」が文芸協会と同様の目標を掲げて成立した。

この時期国民党文芸政策の理論と言える『三民主義文藝論』（張道藩：1954）の他、蔣介石の「戦闘文芸」に理論付けした『論戰鬥的文學』を示したのも、葛賢寧である。彼はまた、『自立晩報』で民國40年（1951）11月に始まる『新詩週刊』に紀弦、鍾鼎文と並んで發起人となっているが、この発刊辞でも戦闘を強く打ち出した。彼は、張道藩路線の配下であり、『新詩週刊』が戦闘文芸に異議を示す論を載せると、あっさりこの雑誌を捨ててしまった⁽³⁴⁾。

なお、葛賢寧の『常住峰の青春』は台湾反共詩の代表作のひとつである。

3.3.2 時事解説、現況分析

胡一貫が朝鮮戦争を語った『韓戰縦横談』は、このままでは和平は無理で第三次大戦に拡大しかねないが、中華民国が大陸に反攻し朱徳、毛沢東を滅ぼすなら、スターリンも戦争を終わらせざるを得ないと予測している。

胡一貫は当時の救国団副主任の一人であった。民國48年（1959）国防大学政治作戦学院が四年制に改められた際には新聞系主任となった。この組織は、メディア領域での軍事宣伝、軍事放送から軍内部の文宣なども扱う人材育成を目標としている。国防大学HPでは、学生の卒業後の進路として『青年日報』『漢声電台』、或いは軍の国会連絡室、軍事發言人室での事務が挙げられている。

この『青年日報』は、当時の救国団と無関係ではない。なぜなら、救国団成立と呼応し、学校での政治運動と合わせて同年代の兵士達も、同様に反共精神

(34) 張道藩の『我們所需要的文藝政策』はこの時期の、三民主義を奉じる文学理論の代表的なものの一つである。

を強化するために、『青年戦士報』発刊が模索され、『幼獅』にわずかに先立つ
民國 41 年（1952）双十節に軍隊内の雑誌として発行された。これが民國 73 年
（1984）に『青年日報』に改称されるのである。

胡一貫はこれに深く関与していた。新中国出版社（抗戦中の青年軍出版社）
は、国民党軍事委員会下の組織で、大陸で『建国青年』『文化情報』『軍中文摘』
『中国畫報』を発刊していたが、遷台翌年の民國 39 年（1950）台北で再開、台
北の国民党政府国防部総政治部に属した。8 月から約半年、胡一貫が社長を務
めた。やがて民國 87 年（1998）に至り、青年日報社に合併された。

胡一貫は、幼獅からは『我們的責任』を民國 60 年（1971）出版している。
国民党批判記事で民國 40 年（1951）に一度永久廃刊処分になった『自立晩報』
が、翌民國 41 年（1952）再発行の際に、総編集に招聘された。（なお、この新
聞は、こうした与党の大物を一時送り込まれたものの、後に中壢事件や高雄事
件の率先報道で、台湾民主化運動に大きく関与した。）

李士英は創刊の前年、民國 41 年（1952）の十大国際事件を解説する。ここ
で取り上げられているのは、⑦のエジプト関連のものと⑨のアイゼンハワー当
選を除くと、ことごとくソ連など共産圏との勢力バランスに関係するものばかり
である。

①ベトナムフランス連合軍の総司令官塔西尼（Jean de Lattre de Tassigny）の死

これは朝鮮戦争と同じ戦闘構図が、インドシナ半島で展開されているため重
視されたのであろう。

②国連で中華民国提出のソ連牽制案が承認される。

③ギリシャ、トルコが北大西洋公約に参加

2 年前のオタワ会議で、ソ連の地中海南下経路を阻むために提案されたもの
で、2 月のリスボン会議で参加が決まる。

④日華修好

英国の反対でサンフランシスコ講和会議に中華民国は参加できず、結局日本
を自由主義陣営に確保すべく 4 月に日本と中華民国の和平条約が締結された。

これで太平洋地区の反共勢力団結の障碍が除去され、共産党勢力には打撃になったと分析。

⑤日本独立

連合国は日本占領の終結を4月に宣言。サンフランシスコ講和条約と日米安保条約が発効、自由主義陣営としては米国の軍事負担軽減につながるとコメントする。

⑥西ドイツと和平条約

米英仏はサンフランシスコでの対日講和後、対独和平条約を結んで西ドイツに再軍備の上 NATO に参加させることを決定、これも対共産主義勢力確保の上で重要と解説。

⑦エジプトに軍事政権

⑧ソ連の第19回共産党大会

10月の大会に、中国が党政軍経済外国の代表団を派遣したと記す。スターリンの後継にマレンコフ。

⑨アイゼンハワー米国大統領に

大統領選で民主党のステーブソンに圧勝。共和党トルーマンの台湾放棄路線からの転換について楽観できないと観察。

⑩米国、水爆実験に成功

トルーマンが1949年4月、ソ連も原爆製造と表明してから、対応を求めた米国は11月に太平洋で水爆実験、これによりソ連の侵攻戦略にブレーキをかけられると分析。

3.3.3 政治関連の理論

沈昌煥の『求知！服務！救国！』は、孫文の「革命的基礎在高深の學問」という言葉を引き、学問に務めること、これは戦時の青年にも要求されることで、その目的は救国建国だとするものである。

長期に渡って中華民国の外交部長を務めた沈昌煥は民國2年（1913）江蘇生まれ、上海光華大学政治系卒業後、燕京大学大学院で学び、1937年に米国ミネ

ソタ大学で政治学修士を得た。国民党政府外交部に勤務，抗日戦争勝利の後は行政院新聞局長，後国民党中央宣伝部副部長となった。民國39年（1950）国民党中央改造委員会で文宣担当の第4組主任であったが，翌年外交部政務次長となった。創刊時はこの職にあり，年末にスペイン大使に任命された。蔣家と非常に近い政治家で，漢賊不兩立を頑なに指針とし続けた。

冒頭筆談にも原稿を寄せた銭思亮は，また『従知識的態度説反共』という一文で，しっかりした基準で是非を判断する知識を身につけよとし，知識への態度として，

- 一，勤慎的態度
- 二，精到的態度
- 三，寛廣的態度

を挙げ，こうした知識を身につける努力をする者こそ救国を語るに足ると結んでいる。

4. 結 語

ここに『幼獅』創刊号を見てきた。創刊号はいかなる雑誌においても一種のお祭りである。

蔣經國肝いりの救国団の雑誌に恥じないように，反共，三民主義，愛国は共通の主題であり，執筆者はすべて国語表現に慣れた大陸出身者で，救国団関係者に政界，教育界，学界，文芸団体で然るべき地位にいる人物を加えている。そもそも，主題自体は，文芸のというよりも，民國28年（1949）国民党総統に復した蔣介石の布告以後の国の方針であり，婦女を中華婦女反共抗俄聯合會，青年を救国団，学校の児童生徒を戡亂教育實施要綱でまとめていったわけで，反共文学はその結果にすぎない。政治色がそれほど濃くない牟宗三のような人物も，伝統的中国文化を破壊する共産党相手となれば，力を寄せてしまう。

1950年代の文学を，懐旧と捉えること，これもまた定着した味方であるが，結局彼らが故郷に戻る手段は，共産党勢力の駆逐しかなかったわけで，当時の文芸政策者は，この時期の台湾での文芸活動を担った作家達に対して，極

めて自然な方向を提供したに過ぎない。

『幼獅』2号には、蔣經國自身の『忍痛受苦，奮鬥前進 - 寫給幹部同志的一封信』が掲載され、理論面も、文芸も内容が増加したが、何人かの固定的執筆者も見られる。徵稿制を文芸面で採用した『幼獅』の意義は、これ以後30年、いかなる作家達に活動の場を与え、また文芸作品にどのような変化が生じたか、また『幼獅文藝』との棲み分け状況で量られるべきであるが、それは次の分析に譲る。